

い出しては貰えることだろう。

同キャンプを拜つ時に分かれて以来、約四十日振りでの再会だったのだ。

「突然で、ごめんなさい。列車が丁度通り掛かった際に思い出したので、居るのかなと思つて、降りてみたよ」

「せっかく立ち寄つて戴いたのに、本当にごめんなさいね。実は、今日から学校が始まるので、今から登校しなければならぬの。だから、代わりに友達を紹介するわね。」
それで、しばしの間、一緒に歩きながら、学校の校門前まで来た時に紹介されたのが友人のブリジットだった。

当人たちに確認はしてなかったことだが、ブリジットがこの夏に卒業して、この九月からの就職になると云うことは、多分、マリーは一学年の後輩になるのかも知れない。

フランス語の会話は解しないが、マリーからブリジットへは、イギリスのキャンプ場で過ごした時の話を説明しながら引き継いでくれてる様子だった。

「ブリジットです。初めまして。 お会い出来て嬉しいです」

「あ！ サトルです。 僕もお会い出来て嬉しいです。 日本から来ました」

「今日は私が案内しますからね」

「それは、嬉しいなあ。 宜しくお願いします」

赤茶系髪色の細身なフランス人美少女ブリジットとの思い掛けない出逢いの機会であった。

彼女が私に友好的な笑顔をチラッとくれた瞬間には、(なんて素敵な子だろう。 マリーも随分、気前がイイんだなあ。 多分、自分には恋人がいるんだろうな……)と若干の勝手な妄想も過ぎたものだった。

平均的な日本人女性の一八歳よりは幾分、大人っぽい雰囲気にも見えるが、彼女のウエルカムモードの笑顔の目線をくれた際にはドキッとする様な可愛いらしさが感じられたものだった。

引継ぎを受けてからの彼女は、私の手をグイグイ引きながら、町のあちこちへと歩き回り、案内してくれた。

町では、丁度、フェスティバルが開催されているから、そこにも行ってみようかと、その会場にも足を運んでみた。

日本でも小規模都市や町などで開催されることのある“ふるさと産業まつり”とでも云った様な処だろうか。

だが、何と、会場では、イセキヤクボタ、ヤンマーと云った日本の有名農機具メーカーの耕運機などの展示販売会が催されていた。

こんな所までメイド・イン・ジャパンの進出が……と、内心、驚いたものだった。

フェスティバルの会場を一通り巡り歩いた後には、他にも一、二箇所を経由しながら、郊外の風光明媚な湖の畔に辿り着いた。

数隻の小型ヨットと手漕ぎボートの係留があり、沖合では一人の若者が水泳を楽しんでいた。それ以外には人影も見当たらない様だ。

二人で湖畔のベンチに腰を下ろすと、目の前に広がる、のどかな風景を見渡しながら、色んな話に花が咲いたひと時だった。

「イギリスでのキャンプはどうでした？」

「うん、楽しかったよ。全体で四十人くらいは居たのかな。だけど、女性が三分の一くらいで少なかつたからねえ。月曜と金曜夜のダンスパーティーの時には大変だったよ

🥰。女の子の引っ張り合いみたいになってしまっただから…🥰」

「オー!! それは、楽しそうだね🥰。私も行きたかったなあ…」

「ハハハ。君も参加したら、そりゃあ、モテモテで大変だったよ🥰」

「私には五人の妹たちが居るのよ。一番下はまだ二歳なの。今月から私は地元の郵便局で働くわ。」

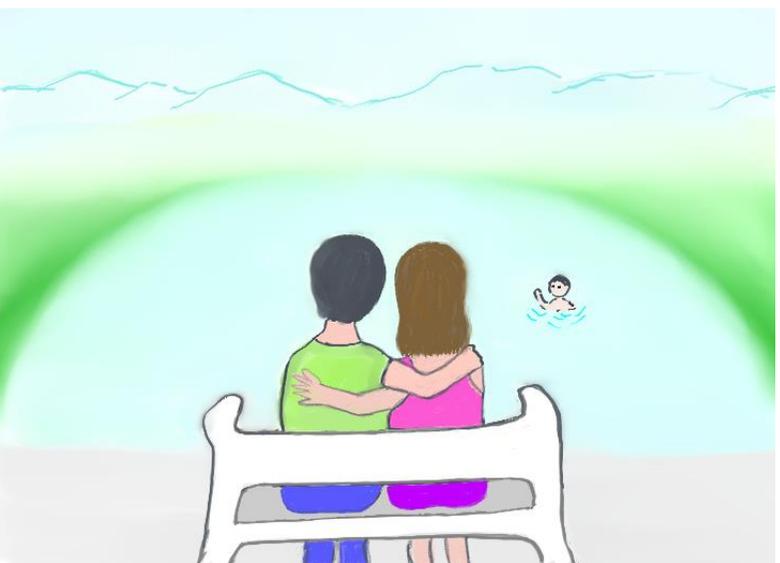
「へっつ。お父さんとお母さんのお仕事とかは??」

「お父さんは中学校で英語の先生。お母さんは小学校の先生をしてるわ」

「そりゃあ、まだ、下が二歳までの子供たち六人を抱えていたら、お父さん、お母さんも、忙しいというか、大変だったろうねえ。だけど、今月からは、君が働くから幾らかは楽になるだろうね」

「サトルは、いいわね。こうして、のんびり一人旅とかが出来て…」

「エッ?! ウーン、まあ…。時間は作るうと思えば作れることだけど、お金の方は、殆ど無いから、無銭旅行みたいなものなんだけどね…。🥰 だけど、団体ツアーでの旅行だったら、決められたコースを決められた時間通りに周るだけだから、『はっい、ここでは三十分間、自由に見学して来てくださっい。何時何分までにはバスに戻ってくださっい』というパターンになる。そういう旅行も、知り合いと一緒に参加するのは楽しいんだけど、こういうローカルな場所に立ち寄ったりと云う



ことは出来ないよね。一人だったら自由だから、何処にでも行ける。それに、行く先々では色々な人との出逢いの機会があったり、こうして、気に入った所では、ゆっくりした時間を過ごしたりも出来る。それが、僕にとっては旅の醍醐味だと思うし、一番、思い出にも残ることだよね」

「羨ましいわ。叶うことならば、私もそんな旅行がしてみたいよ。」

「それと、素晴らしい風景に出会った時には、勿論、それは、それでの感動はあるけれど、いつして、人との出逢いがあればドラマがある。どんなに美しい風景を眺めた処で、人との出逢いが無かったらドラマは生まれないよね」

「へっっ。うっん。そうよね。あなたの云うことって面白いわ。でも、そんな旅には憧れるなあ。」

「だけど、女性の場合には、やはり一人では無理と云うか、危ないよね。道中、何があっても分からないから。友達との二人旅だったら良いだろうけど」

「そうよねえ。やっぱり、無理よねえ…。日本はどんな所かしら?」

「そうだなあ。一言では難しいけど、日本では平地と云ったら、都会か田舎の田園風景くらいものだから山が多いよね。そして、四季折々での自然の美しい所なら沢山あるよ。それと、全国的に温泉が多いな。もし、君が日本に来れる機会があったなら、連れて行きたい様な所は沢山あるなあ」

「行ってみたいわ。叶うことなら…」

「じゃあ、その内に機会があったなら、日本の「ソノク」のロテンブロにでも👉👈」

「エッ!! 何? 「ソノク」? 「ロテン…」?」

「アハハ、「ソノク」と云うのは、男性も女性も一緒に入れる共同浴場のこと。ロテンブロ」と云うのは屋根がなくて、空や外の景色が見渡せる様なお風呂のことだよ👉👈日本人は温泉や露天風呂が大好きだからね。露天風呂の温泉なら全国の何処にもあるよ👉👈」

「フッオ!! 楽しそうだねえ。日本の温泉って」

「はっはっは静かに時が流れていた。

否、流れていたのか、それとも停まっていたのかは定かでないのだが、ブリジットによる甘美なフランス式のおもてなしモードの中では、いつしか、なかなかのイイ雰囲気にはなっていたものだった。

お互いの視界の中からは、ほぼ全てのモノが消失していただろうか。

未熟な私においては、なかなか出来ることではないのだが、流星、若いフランス女性においては、ムード作りと云うのがとても上手いものだと思った。

雲の上を歩いている様な境地だったのかも知れない。

ふと、顔を上げた時にひと言があった。

「サトル…」

「ん?! 何?」

「あなたも泳いでみたら、どう?」

沖合で泳いでいる若者を眺めながら、ふと、私に振ってきた。

「いやあ、いいよ。水着を持ってないんだから、やめとくよ」

と、ブレーキを踏む。

そうした、やり取りの間にも、沖合で泳いでいた若者が水から上がり、こちらの近くに更衣所らしき小屋があるので近づいて来た。

どうやら、そろそろ帰り支度の気配かとは感じられたのだが、彼女との、ひと言、ふた言のあとに、また、私に振ってきた。

「水着なら、彼が、もう一枚持つてるから貸してくれるさうよ。だから、あなたも泳いでみたら、どう?」と、きた。

（どうしても、ここで私を泳がせたいのだからか…）

確かに、沖合で泳いでいる若者を眺め

ながらでは、「気持ち良さそうだなあ」とは思っていたものの、余りに予定外かつ想定外のことではあった。

まさか、こんな所まで来て、しかも、他人様のパンツを借りてまで、との躊躇いもあった。見渡す限りでは遠浅な様であり、水温も、余り冷たくはなさそうだった。

遠方、奥の方では左右の何れか方向に広がってるかも知れないので、湖全体の奥行き、広さというのは良くは判らない。

何れにする、ちよつとした、着替え所の様な小さな小屋があり、先客も居たのだから遊泳禁止の場所という訳ではないのだろう。何より、地元、ブリジットの案内でもあり、私に勧めてもいるのだから。

彼女からの熱心なそのかしには乗せられてしまい、しばしの水浴で遊んでみることにした。

遊泳中での、ベンチのブリジットはというと、時折、私の方に手を振り、笑顔を送りながらも楽しそうな様子だった。

それにしても、こんな所まで来て、泳いで遊んだ日本人と云うのは、おそらくは歴史



上でも私が初のことだろうな……。しかも、見ず知らずの他人様のパンツを借りてまで……。

そんな妄想が一瞬、過ぎたりしながらも、旅の汗が流せたようで、あとにはスッキリ爽やかな気持ちになれたものだった。

まんざら、人の話に乗せられるのも、たまには悪くないのかな、と。人生上での貴重な思い出のワン・シーンにはなった様だった。

湖で遊んだ後の、夕方には自宅に案内してくれた。

家に着くと、突然の東洋人の来客は、家族にとつても、想定外のことなので、一瞬の驚きの様な空気感があったものの、彼女から両親への説明を経た後には、直ぐに和やかな、おもてなしの雰囲気になり、皆さんには受け入れられ、歓迎されたものだった。

彼女からは、両親と、五人の妹たちの一人づつを紹介された。

五人の妹たちは、この九月から高校生のエニークと、中学生になるフランシーヌ、小学四年生になる双子姉妹のエブリンとジャスリン、その下には、まだ二歳のアレンまでだった。

家族を一通り紹介された後には、改めての、ブリジットからフランス式の歓迎の挨拶を受けた。

当時には、まだ、フランス式の挨拶と云うのは体験したことも、見たことも無かったので、頬を左右交互に私の顔に近づけてきたところでは、両の頬に軽くキスをするものと思いい、対応したところ、妹たちは、キャッ、キャと大きな声を上げての大盛り上がりだった。

一気に、場の雰囲気は、和やかで、かつ賑やかなものとなった。

その後には、妹たちや両親とも軽いハグでの挨拶を交わす。

家族とのやり取りでは、中学校での英語教師をされているお父さんとの会話が大半だった。

先刻に足を運んだ町のフェスティバル会場では、日本の農機具メーカーの耕運機などの展示販売会が催されていたのには驚いたという話をする、両手を左右に小さく広げてのジェスチャーを交えながら、

「いや〜。もう、何でもかんでも……。今は日本の製品が溢れているよ。テレビ、オーディオ、カメラ、車……」と。

ため息交じりの様にも受け取れた。

「そつなですか」

「それにしても、日本人の旅行者といったら、大抵は団体のツアー客がほとんどだけど、君みたいに一人で、しかも、こんな田舎町までの旅行者と云うのは珍しいよねえ。初めて見かけたよ」

「はあ。まあ、気の向くままに、と云うか、自由な旅が好きですね」

「将来は何になりたいのかな？ ディレクター？」

「いえ…。。まだ、ハッキリしたところではないのですが、取りあえずは、何処かの会社に就職してから」と云ったところでしょうね」

会話の中では、他にも色々な質問があったが、「ここでの“ディレクター”との言葉の趣旨では漠然とした印象ではあったものの、何となくの直感的には、将来のプリジットにとってはどうなのかな（？）と云うか、私への査定なり、探りを入れられてるのかな、と云う様な気配には感じたものだった。

それは、逆の立場であれば当然のことのようにも思えるので自然なことだろう。

「当地、フランスでは物価が高いから生活もなかなか大変だよ。例えば、日本では、バスの運転手とかだったら、給料はどのくらいなのかな？」

と、問われた際には、果たしてどの位なのかの認識は私にもなかったので、適当な感覚での受け答えにはなったのだが、

「そんなに高いのか。フランスと同じくらいだなー」と、驚いておられたので、少々、高すぎる様な応答になってしまったのかも知れない。因みに、その頃の為替相場でのードルは概ね、二百四十三円前後位だった様な記憶だった。

一八歳から二歳までの六人の娘たちを抱えての生活と云うのは、公務員の両親の給料だけでのやりくりと云うのは、フランスではなくとも、楽ではないのかも知れないだろうか。

お母さんと妹たちは、お父さんと私のやり取りを眺めながら、にこやかな様子だった。

「君の髪は綺麗だねえ」

ふと、お父さんから掛けられた言葉は予期しない内容ではあったが、傍らのお母さんと娘たちの方にも視線を送りながら通訳されると、皆さん頷かれての同調モードではあった。

日本人の場合には、ほぼ百パーセントが黒髪単色なので、珍しくも何でもないことであり、無論、これ迄の人生上でも髪が綺麗だなどとは、只の一度も褒められたことなどはある筈もない。

多くの、フランス人の場合には、黒から明るい茶系にかけての混在した様な中間色系が多いので、或いは、日本人の様な殆ど混じり気のない、単黒色と云うのが、希少であり、或いは、綺麗にも見えたのか単なる社交辞令なのかは良く解らない。

只、そう云えば、かのフランス俳優のアランドロンも、人気歌手のアダムにしても、濃い黒髪だったなあとは勝手に思い出しては納得した様な気がしたものだ。

逆に、日本人からフランス人を見た場合には、色々な髪色のバリエーションがあるのは、それはそれでの魅力でもあり、人には様々な違いと云うものがあるので、人は、自分にはないモノを他人が持っていると云う所に、或いは、魅力を感じては惹かれると云うものなのかも知れない。

また、それ故にこそ、金髪や茶髪などの明る目の髪色に憧れを感じる日本人と云う

のも少なくないのだろう。

夕食には、お母さん手作りの料理が振舞われて、大変ありがたく美味しく頂いた。そして、その後には、ブリジットからの、

「レッシェーゴートウ パプー！」

との誘いで、手を引かれて近くの小さなパブに出掛けた。

店では、七、八人が十人くらいの先客が居た。

概ね、二十代から三十代前後くらいの若者層が多い様な店だった。

アルールには弱いのだが、取りあえずは、ビールでの乾杯。🍷

店内では、普段は見かけない様な東洋人の来店と、それに、ブリジットとの目立った組み合わせなので、周りからの珍しげな視線と云うのがあちこちから感じられたのだが、彼女自身は、一向に気にしていない様子だった。

「明日からは、どちらの方に行くの?」

「えっ? ああ…。明日は、一旦、パリに出てからは、イタリアの南部の方かな。それとも、スペインの方になるかな。パリ駅からの列車の時刻表次第だね」

「いいなあ。出来ることなら一緒に付いて行きたいよ。残念だわ」

「……。」🙄

可能なことならば、帰国便の切符を売り払ってでも、当地でのアルバイトでもしながらの居候で、期間を延長出来ないものだろうかとの妄想はあったのだが、如何せん、残り時間が余りに少なくなってきたので、今さらではどうにもならない処ではある。

翌日の夕方、十八時を過ぎた頃にはブリジットの付き添い見送りでセダンの駅に着いた。

駅での彼女は前日の楽しそうな雰囲気とは一転して、とても寂しそうな表情だった。

二人でベンチに腰を下ろして列車を待つ間には、彼女からの延々としたお別れの抱擁とキスがあった。

彼女の温もりと息遣いが静かに伝わってくる。

やがて、ホームに入ってきた十九時過ぎ発のパリ行特急列車に乗る。

窓側の席に座ると、お互いに込上げてくるものがあるようだった。

定刻になり、列車が動き出すと、列車の窓から見えなくなるまで、彼女はホームで手を振っていた。

ベンチでは、「アィム・ピディ・ナウ」とつぶやいていた彼女の言葉がいつまでも耳奥に残り、こだましている様だった。

(九月十五日、土)

前日朝からの二日間と云う短い時間ではあったが、人生での充実した良い思い出の一ページとして残る様なひと時ではあったことだろう。

時刻は既に、二十二時二十分になるので、もうすぐ、多分、あと十数分位ではパリに着くのだろう。

多分、彼女も今は私のことを想像していることだろうか。

「もうそろそろ、パリに着いただろうか・・・」とか。

或いは・・・

「そう言えば、パリでは何処の予約もしてなさそうだったけど、今夜遅くにパリに着いてからは、一体、何処に泊まるのだろうか。。。大丈夫なのかな」とか。。。

パリ東駅への到着は二十二時半を少し過ぎた頃だった。

只、到着時刻が余りに遅い時間帯でもあり、加えて、その直前から降り出した雨が次第に激しくなってきた。これでは雨に濡れずにはユースを探して辿り着きようがないので、少し郊外寄りに一駅程引き返して、ローカルな小さな駅の構内ベンチでの野宿を考え、移動した。

然しながら、駅構内の室内側では落ちて着いて安眠を得られそうな場所も無かったので、仕方なく、屋外ベンチでの野宿とした。

無論、快適な安眠とはいかないのだが、致し方ない。

